[共通セッション] 橋と社会

2026年9月2日(水) 9:20 ~ 10:40 | 7号館3階D30（北海学園大学）

橋と社会(1)

座長：判治 剛（名古屋大学）

9:50 ~ 10:00

[CS7-04] 地域に根差した大田区のチャレンジ　区民との協働で新たな橋の価値を探す取組み

*平野 綾子[1]、後藤 朋子[2]、岡野 登美子[3]、多和田 俊介[1]、岩波 光保[4]、津田 誠[5] (1. 株式会社アイ・エス・エス、2. 放送大学、3. アイセイ株式会社、4. 東京科学大学、5. 石川工業高等専門学校)

キーワード：橋梁、長寿命化、維持管理、住民協働、新たな価値

自治体等によって整備や維持管理されるインフラは，いつしか「あって当たり前」の景色になってしまった．　大田区では，区民が橋梁の現状を認識し，正しい情報に触れながら橋梁との関わり方について考える環境の構築を通じて，区民一人ひとりが橋梁の存在による恩恵や価値を改めて認識し，さらには新たな価値に気づいていくことが重要であると考えている．　本稿では，「大田区橋梁長寿命化修繕計画 区民協働編」にとりまとめた大田区の考え方及び基本方針に加え，幅広い年齢層を対象に実施してきた大田区における区民協働の取組みについて報告する．

© 2026 Japan Society of Civil Engineers

地域に根差した大田区のチャレンジ
区民との協働で新たな橋の価値を探す取組み

株式会社アイ・エス・エス　正会員　○平野 綾子，多和田 俊介
放送大学　正会員　後藤 朋子
アイセイ株式会社　岡野 登美子
東京科学大学　正会員　岩波 光保
石川工業高等専門学校　正会員　津田 誠

１．はじめに

自治体等によって整備されたインフラは，そこに暮らす人々の財産である．しかし，自治体等によって整備や維持管理されているため，自分たちの財産であるという意識が薄れ，インフラに囲まれて暮らす人々の目に映るものは，いつしか「あって当たり前」の景色になってしまった．日常生活を支える存在である一方，高度経済成長期を中心に整備された多くの橋梁は，老朽化の時期を迎え，修繕や更新に要する費用は年々増大しているが，橋梁の老朽化や維持管理の実情，さらには集約化撤去といった議論の背景は，必ずしも住民と十分に共有されているとは言えない．このような背景の中で，住民が橋梁の現状を認識し，正しい情報に触れながら橋梁との関わり方について考える環境の構築を通じて，住民一人ひとりが橋梁の存在による恩恵や価値を改めて認識し，さらには新たな価値に気づいていくことが重要である．

本稿では，「大田区橋梁長寿命化修繕計画 区民協働編」にとりまとめた大田区の考え方及び基本方針に加え，幅広い年齢層を対象に実施してきた大田区における区民協働の取組みについて報告する．

２．大田区橋梁長寿命化修繕計画 区民協働編の策定プロセス

前述の背景を踏まえ，本取組みを整理するにあたり，区民協働編の策定プロセスは図-1 に示すとおりである．重要なのは具体的な取組みを実施する前段階において，どのように継続性のある取組みとするかを検討し，あらかじめ調査を行ったうえで，自治体の中でひとつの計画として位置付けたことである．

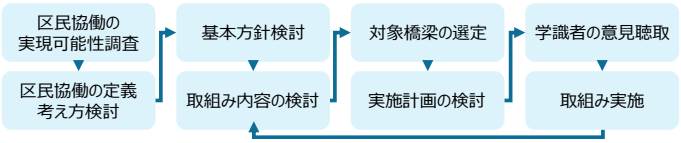


図-1　区民協働編の策定プロセス

そのためにも，実現可能性調査として区民の地域活動への関心や参加状況，インフラへの意識や要望等を把握するための調査を行った．具体的な取組みが定まる前に調査を実施し，区民協働に対する幅広い概念や考え方を整理した．その後，上位計画における協働の考え方を確認し，自治体の様々な協働の中で橋梁分野の協働としての位置付けを明確にした．取組み内容や対象橋梁の具体的な検討は，こうした位置付けを明確にしたうえで進めることが有効である．実際にいくつかの区民協働の取組みを実施し，それらから得られた知見等を踏まえて，区民協働の考え方を整理したうえで，区民協働編としてとりまとめたものである．

３．区民協働の考え方

区民協働の取組みは，図-2 に示すとおり，「維持管理に主軸を置いた取組み」から「インフラの価値向上に主軸を置いた取組み」まで，連続的な広がりをもつものとして整理することができると考えた．

図-2　区民協働の定義

そのうえで，本稿では区民協働を「広義の区民協働」と「狭義の区民協働」に区別して考えることとした．狭義の区民協働とは，インフラの簡易点検や清掃等，実際に区民が参加し，何らかの形で作業に関わる取組みを指すものとし，広義の区民協働とは，こうした狭義の区民協働に加えて，インフラ維持管理に関する広報や理解促進の取組みまでを含むものとして整理した．

キーワード　橋梁、長寿命化、維持管理、住民協働、新たな価値
連絡先　〒106-0047 東京都港区南麻布 5-2-32 興和広尾ビル 2F (株)アイ・エス・エス TEL03-6408-6195

© Japan Society of Civil Engineers

4．大田区における区民協働の基本方針

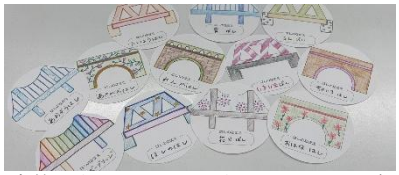
大田区における区民協働は，単なる理解促進や新たな担い手確保のみにとどまるものではない．これから大きく変化する社会の中で，橋梁を取り巻く状況や役割について区民と共有しながら，区民一人ひとりが橋梁の存在による恩恵や価値を改めて認識し，さらには新たな価値に気づいていくことが重要であると考えている．こうした積み重ねを通じて，橋梁が地域にとってどのような存在であるかを，道路管理者と利用者がともに考えていくことが，結果として地域にとっての橋梁のあり方が見えてくることにつながるものと考える．

その第一歩として，大田区では，橋梁に関する情報発信や区民との協働による点検といった取組みを「大田区橋梁長寿命化修繕計画 区民協働編」に位置付け，これらを通じて橋梁との新たな関わり方を構築することとした．

5．大田区における区民協働の取組み

大田区ではこれまで，幅広い年齢層を対象に年齢や世代の特性を踏まえた，表-1 に示すような様々な取組みを実施してきた．橋梁の維持管理に対する理解促進のためには，SNS 等を活用した一方的な情報発信のみならず，お互いに時間を共有する形での対話を通じた取組みが重要である．

表-1　年齢や世代の特性を踏まえた広義の区民協働の取組み

幼児等向けの興味を促す取組み	小学低学年向けの興味を促す取組み	小学中・高学年向けの興味を促す取組み
大田区では，橋梁の維持管理の大切さをテーマとした紙芝居を製作し，幼稚園や小学校，子ども向け講習会等において読み聞かせを実施した． 橋梁の維持管理は，子どもたちにとって必ずしも身近なテーマではないが，親しみやすい形式で表現することにより，関心を引きながら伝えることができる可能性が示された．	小学校近くの橋梁において実施した高欄ラッピングの装飾では，橋梁をデフォルメした塗り絵を製作し，小学校 1･2 年生の児童に色塗りを行ってもらった．  日常的に利用している橋梁であっても，自ら関わる体験を通じて，橋梁に目を向けるきっかけを生み出せることが示された．	全校児童を対象に，空中ドローン，3D レーダースキャナ，非破壊検査装置等の技術体験会及び小学校に隣接する橋梁の架け替え工事現場の見学会を実施した． 橋梁整備に時間と費用を要していること，新技術活用への気づき，大切に使おうと思う意識や働く人への配慮といった感情の醸成にもつながることが示された．
大学生等向けの興味を促す取組み	**社会人向けの理解を促す取組み**	**区民の協力で技術開発を促す取組み**
多くの学生の目に留まる機会であるとともに，地域の方々も訪れる場として，東京工科大学の文化祭において「みんなのくらしをささえる森」と題した情報発信を行った． コンクリートストラップの製作をはじめ，紙芝居の読み聞かせやインフラ維持管理を題材にしたカードゲーム，VR 体験等を通じて，学生のみならず，幅広い年代の人々が橋梁の維持管理に触れる機会を創出できた．	情報提供による理解促進にとどまらず，体験を通じて橋梁への関心を高める取組みとして，橋梁点検の講習（初級・中級）と実務体験を組み合わせた取組みを実施した． 橋梁を身近に感じてもらう機会となり，何を撮影すれば良いかを明確にするためには，損傷種類の解説等を行う講習会が有効であることや，継続的に実施し，取組み自体にファンを増やしていくことの重要性が示された．	技術者でない区民であっても橋梁点検の一端を担える可能性の検証として，区民私物のカメラによる橋面撮影と，その画像を用いた AI によるひび割れ等の変状検知を試行した． 品質にばらつきが生じることや，撮影難易度が高いことなどが課題として明らかとなった一方で，一定程度の変状検知が可能であることが確認でき，今後の技術開発及び運用方法の工夫による発展が期待される．

6．区民協働による期待及び効果

区民との情報交換や理解促進が進むことで，日常的に利用している橋梁への関心が高まり，インフラを「自分ごと」として捉える環境が醸成される．これにより，軽微な変状の早期発見による予防保全の促進や，将来の点検の担い手確保といった効果が期待される．

7．おわりに

本取組みは維持管理にとどまらず，区民がインフラに関心を持ち，理解を深めるきっかけになるものであり，多様な地域課題の解決手段としての活用や地域活動の活性化にも資する可能性がある．また，区民との継続的なコミュニケーションを通じて，道路管理者が自らの業務や地域の現状を見直す好機にもつながると考えられる．さらに，地域活動の一環として定着することで，より幅広い層の参画が促され，新たな地域コミュニケーションツールになることも期待される．将来的には安全かつ信頼性の高い参画環境を構築し，誰もが気軽にインフラの維持管理に関われる社会の実現を目指す．

© Japan Society of Civil Engineers